

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.12

「煙が目にしみる」頃が確かにあった
だが、いまや目にしみるほどの煙をどこで感じられるだろう

家庭からかまどが消え、屋根の煙突がなくなった
蒸気機関車のあの猛々しい音と煙も時代とともに姿を消した

都市の生活は火や煙をますます覆い隠していく
火は危険だ、煙はけむたい、健康にも良くない、…
「禁煙」の表示はそのようなメッセージを
示しているようにもみえる

家庭から、建物から、いやすべての世界から
火も煙も追放されるときが来たのだろうか
火を知らない世代がついそこまで来ている
火のない生活は考えられないというのに！

炭焼きがまの煙はそんな思いとは無縁に今日もたち上る



風の便り

辻 喜代司さんは、野殿・童仙房からそれほど遠くない甲賀市で農業にたずさわりながら、大学院で研究を行なっています。地域社会での世話役などを務める生活者の視点と、生涯学習の研究者としての視点の双方を持って、これまでの野殿・童仙房を訪問した感想をまとめてもらいました。



茶刈り用手ばさみ（童仙房）

一院生の見た野殿・童仙房——生活者と研究者の視点から

辻 喜代司 Kiyoshi TSUJI 教育学研究科修士 2 回生

「廃校」に子どもが集う情景

私が院生として初めて野殿・童仙房を訪問したのは、「風と雲の市」（第1回）が開催された一昨年4月末のことです。9時半すぎの到着だったと思いますが、廃校になった旧野殿童仙房小学校の校庭で、大勢の子どもたちが遊んでいる光景に驚きました。実は、「市」の開催にあわせて、コープさん(現、「生活クラブ大阪」)の子どもたちが現地を訪れていたのです。私の当日の担当は特産品販売の「円」売り場の方でしたが、地域通貨「チャオ！」が流通する様子も、子どもたちの笑顔とのセットで記憶に残っています。子どもの数がどんどん減っている中で、子どもを通して親御さんと知り合いになるという空間との出会いが、私の最初の童仙房体験でした。

「匂」を味わう空間

その後、旧小学校の調理室を利用した講座や、畑作りの農業体験にも参加するようになりました。しいたけやお茶、トマトをはじめとして、時々にお目にかかるこの区域の特産品には独特の香りがあります。一度、取れたてのたけのこをふかして、自家製の味噌でいただく機会がありました。これはもう絶品としか言いようのない味わいです。特産の猪肉や鹿肉も同様で、香りの良さに独特の風味があるのです。総じて「匂」を生かす工夫とでも言うのでしょうか、受け継がれてきた食文化の豊かさを感じないわけにはいきません。高原状の地形が「猿害」を防いでいることも土地の強みになっていると思いました。

研究活動への参加

秋口からは「研究開発コロキアム」の一員として、研究活動にも加わりました。私は、区域に残された何をどのように守っていくのか、という視点から、過疎化傾向がより鮮明になってきている野殿区で、区行政組織再編の方向性と伝統行事の維持運営のあり方を学ばせていただきました。それは、私自身の生活者としての感覚が、教育学研究の中で問い直される経験でした。

自分との関わり、区域との関わり

私が在住する区域（甲賀市南端の重粘土地帯）には、昭和38年の圃場整備の際に敷設された用水路が多数存在し、最近その劣化のために、水漏れや山土の圧迫による折れがあちこちで起きて、農業基盤がおびやかされるようになりました。この修復・保全作業を集落として自前でやるために、旧来の区内組織を再編しながら、国庫補助を導入・活用する地域活動に5年任期（会計）で関わっています。集落内にはさまざまな技術をお持ちの方がおられます。しかし、それを提供してもらうための仕組みづくりをするには、区域内組織との整合性を図る必要があります。例えば「株」（葬祭運営の同族会）や「講」などの地域に残る伝統的なシステムをどう生かしていくかは、どの集落でも起こっている古くて新しい問題ですが、逆に地域の「継承」を考える良いチャンスともいえます。

こういう「継承」の問題を含む地域の再編には、これまで学んだことを捨てて新たな考え方を取り入れていくことが必須になります。学ぶことの「編みなおし」が要請されるのです。自分や家族、自分の暮らす地域の現在直面している問題とも重ねあわせながら「編みなおし」の問題にも取り組んでゆきたいと思います。



湧水（野殿道）

大学につながる回路をもつ区域

私にとって、野殿童仙房生涯学習推進委員会というのは、以上書かせていただいたこと全体の糧です。生活者としての実感から言えば、農業集落というのは、どれだけ隣接していても、あくまで独自の歯車で動くように設計されたものです。土地という言葉からもわかるように、その土質が異なるわけですから、自分でやるしかない、というところがあります。そこに、「生涯学習」という「なんでもあり」の橋がかかっているという構図自体がととても斬新に感じられます。しかも、それは「大学」の「教育学研究科」という「つなぎ」の研究組織を通して、地域外の回路（別のチャンネル）につながっているという特徴を備えています。どう使えばこれが一番輝くのでしょうか。その道筋を見定めるための、アイデアにあふれた企画にこれからも参加し続けたい、と思っています。

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科
TEL：075-753-3075, URL： <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/>

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄／副会長 西村秀俊

2009年3月24日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科
教育実践コラボレーション・センター
「教育空間創造ユニット」
編集：前平泰志
編集協力：辻喜代司
制作：(株)松籟社

2008 年度 野殿・童仙房での生涯学習の取り組み

2006 年度、2007 年度と順調に年を重ねてきた野殿・童仙房地区での取り組みも 3 年が終わろうとしています。2 月に「野殿童仙房生涯学習推進委員会」の役員さんたちが京都大学に来訪。矢野研究科長と話し合い、今後も京都大学大学院教育学研究科と野殿・童仙房地区が引き続き連携を進めていくことの再確認をしました。以下、今年度行なった取組みを中心に順不同ですが、全体を振り返っておきたいと思ひます。

1. 大学と地域を結ぶ——広報誌『風と雲の便り』

広報誌『風と雲の便り』も、おかげさまで 12 号まで刊行することができました。広報誌の主な役割は、地域の人に私たちの活動の概要を知っていただくことです。それとともに、次のようなことも考えるようになりました。歴史の異なる野殿と童仙房の二つの地域は、隣接していますが、どうやらお互い同士深い理解をもっていたとはいえないようです。たとえば、野殿の古くからある伝統的な祭事について、童仙房在住の人は知る機会がありません。私たちの広報誌が、両地域がこれまで以上に相互に理解しあえるための媒体になることも願っています。

2. 「おいしい音」を食べる——創作料理から学ぶもの

昨年度同じ時期に行なった企画「味覚と他の感覚を重ねあわす——もうひとつの生涯学習」が好評でしたので、この企画を発展させた料理と講義の 2 本立ての学習を 5 月に『耳を澄ます料理』を味わう」というテーマで行ないました。講師はおなじみの sun-aid Eisuke 店主、阿山哲生さんです。今年度は、五感の中で、料理に際して比較的忘れられている感覚、聴覚を軸にして迫ってみました。地元の旬の食材を使った料理が出来上がって行く過程を、さまざまな音に耳を澄ましながら楽しむというのは、あまり例を見ないのではないのでしょうか。聴講された方の中に目の見えない人もいらっしゃったのですが、とても面白がってくれたことが印象的でした。

3. 語り口の面白さ——紙芝居というメディア

語り口の面白さといえば、印象に残るのは、7 月の「風と雲の広場」で行なった、昔ながらの「紙芝居」の実演です。これは京大の紙芝居研究会の諸君がサポートして実現したものです。安野侑志さんという本職の紙芝居師さんの口演と子どもたち自身が創作紙芝居を作るワークショップの二本立てで行なわれましたが、どちらも、子どもだけでなくおとも楽しめる企画でした。内容の面白さに加えて、その独自の語り口と紙芝居師さんと子ども（おとな）とのやり取りは、まさに抱腹絶倒ものでした。かつて童仙房に在住し、町に降りてから文房具店を営んだことのある方がわざわざこの紙芝居を見るためにやってきてくれたことも嬉しい出来事でした。（「風と雲の広場」のために文房具をご寄付していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。）同研究会のメンバー、馬場智子さん（大学院生）も書いているように、「自分の気持ちを発することの楽しさ、人の思いを聞くこ



との面白さ」にみちあふれた充実した時間だったと思ひます。

4. 不思議と面白さの取り合わせ——万華鏡とブーメランづくり

同じ「風と雲の広場」の催しのなかで、昨年に引き続き、江角陸先生にお出でいただき、万華鏡やブーメランの制作の指導をお願いしました。出来上がった万華鏡やブーメランを見ると、あまり経費をかけてなくても、入念な準備とアイデアでこれほどのものが出来るのかという驚きで一杯になります。



子どもたちに、不思議と驚きの心を持って科学を学んでもらおうとする江角先生の静かな情熱がいつも伝わってきます。

5. リズム感覚を学ぶ——野童太鼓を聴く

野殿童仙房小学校の教員を永く務め、ついに童仙房の住民になられた馬場正幸先生の指導の下、中学生や高校生の教え子たちが力強く和太鼓を敲くのは圧巻です。野殿と童仙房の一文字を取って結成されたサークルのネーミングも素敵です。



6. 専門家の地域への関わり

——「なぜ心理学者が地域に足を運ぶか」

4 月早々に、フィールドに実践的な関心をもって、自らも研究室を飛び出してさまざまなフィールドに入っている心理学者（やまだようこ、杉万俊夫、永田素彦各先生）を招いて、シンポジウムを持つ機会を作りました。この企画は、グローバル C O E とのジョイント企画でしたが、このテーマは、とても普遍的なテーマで、「心理学」と「地域」という取り合わせが面白かったからでしょうか、シンポジウムでは、地域の人からも熱心な質問が続出して大変盛り上がりました。

7. 大学院生の地域への関わり

——「経験知と学知の境界線を越えて」

9 月には、グローバル C O E プログラム「E X ラボ」の企画の一環として、お互いに関心も専門領域も異なる 7 名の大学院生たちが、初めて野殿・童仙房の地を訪れました。この地域についてのレクチャーを受けたり、実際に散策をしたり、夜は元の校庭で地域の人たちを交えたパーベキューパーティーを行な

いました。地域への関心を深めたのは勿論ですが、自らの研究を見つめなおすきっかけにもなったようです。

8. 「普通」の人のライフヒストリーを聴く——「私を語る」

昨年度に引き続き、生しいたけを栽培している櫛田豊久さんにお世話になりました。櫛田さんは、都会から童仙房へ移住してきたいわゆる I ターン組の一人で、しいたけ栽培は 0（ゼロ）から出発した人です。クヌギやコナラの自然木による栽培によってつくられた生しいたけを焼いて塩だけの味付けでいただきながら、しいたけが栽培されるまでをわかりやすくパワーポイントで図示して教えていただきました。しいたけといえば、スーパーで売っているものしか知らない若い学生にとって、採れたての原木栽培のしいたけの味が、どんなに美味しいものか、身をもって体験したと言えましょう。続いて、何故櫛田さんがこの地でしいたけ栽培を始めたかという疑問に答える形で自らのライフヒストリーを語ってくれました。学生たちは、サクセスストーリーや自慢話ではない、失敗や挫折を含めた人生の途上を語る「普通」のおとながいることに驚きと共感を抱いたようでした。

9. 遠回りしながら学ぶ——農業体験「うねうね」

今年度は、「昔子どもだったおとなと今の子どものための農業体験」から「うねうね」と名称を変えて地域の人たちと京大生とともに畑作業に取り組みました。種



2008 年度 京都大学 野殿・童仙房地域における活動一覧

4 月 18-19 日	シンポジウム 「なぜ心理学者が地域に足を運ぶか」	8 月 30 日	農作業体験「うねうね」（種まき・苗植え）
5 月 16 日	広報誌『風と雲の便り』第 9 号発行	9 月 27 日	農作業体験「うねうね」（間引き・草引き）
5 月 24 日	童仙房のお茶農家の茶工場見学	9 月 27-28 日	京都大学グローバル COE プログラム「EX ラボ企画」教育学研究科提供「野殿・童仙房フィールド研究体験——経験知と学知の境界線を越えて」
5 月 25 日	「耳を澄ます料理」を味わう！ 〔講師：阿山哲生さん、sun-aid Eisuke〕	10 月 19 日	童仙房大神宮（童仙房地域）の秋祭り、見学
7 月 12 日	童仙房にて「風と雲の広場」案内配布	10 月 25 日	農作業体験「うねうね」（間引き・草引き） フィールド学習「私を語る——しいたけ栽培とともに」 〔講師：櫛田豊久さん、原木栽培しいたけ生産者〕
7 月 23 日	広報誌『風と雲の便り』第 10 号発行	10 月 26 日	六所神社（野殿地域）の秋祭り、見学
7 月 26 日	「風と雲の広場」準備作業	11 月 19 日	広報誌『風と雲の便り』第 11 号発行
7 月 27 日	第 3 回「風と雲の広場」開催 ・紙芝居 〔実演：安野侑志さん（京都国際マンガミュージアム・京大紙芝居研究会顧問）と「京大紙芝居研究会」の皆さん〕 ・万華鏡とブーメラン 〔講師：江角陸先生、大阪府立千里高等学校〕 ・野童太鼓 〔馬場正幸先生と地元のみなさん〕 ・地域通貨「チャオ！」の広場 ・「いつでも だれでも なんでも マーケット」	11 月 22 日	農作業体験「うねうね」・収穫祭（秋の祭典の準備）
		11 月 23 日	南山城村「活き生きまつり」 〔地元の特産品を使った料理や収穫した野菜等を出店〕
		2 月 1 日	童仙房の消防団の集まりに参加
		2 月 14 日	京都大学にて協定期間の延長
		3 月 24 日	広報誌『風と雲の便り』第 12 号発行

まきから間引き、草引きを経て、秋にはいろいろな野菜を収穫し、皆で収穫を喜ぶために収穫祭を持ちました。

10. 聞き取り調査活動の開始

今年度の特徴といっていると思いますが、ようやく私たちが学校という空間から一歩踏み出て、暮らしや歴史について地域の人から直接お話を伺う機会を得られるようになってきました。お茶刈り、冠婚葬祭、開拓の歴史などについて、学生たちがそれぞれ自分の課題を持って体当たりの聞き取りをした記録は、「風と雲の便り」（第 11 号）やコロキアム報告書にも報告されています。来年度から本格的に実施予定の調査活動の第一歩として位置づけています。



六所神社（野殿地域）

なお私たちの活動の一端は、A B C 朝日放送のラジオ報道番組「おはよう！ ニュース探偵局」（7 月 15 日～19 日）の早朝 5 分間のシリーズで報道されました。

また、より詳しいことについては、野殿童仙房生涯学習推進委員会のホームページ (<http://souraku.net/manabi/>) を設けていますのでそちらを参照して下さい。

前平泰志

なお、このまとめは、京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター『子どもの生命性と可能性を育てる教育・研究推進事業』（平成 21 年 3 月）に掲載された文章を一部加筆修正したものであることをお断りしておきます。